

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00164

研究課題名(和文) ジュゼッペ・タルティーニの理論的著作における音楽の数学的基礎づけとその思想的背景

研究課題名(英文) Mathematical Basis of the Theoretical Works of Giuseppe Tartini and its Background

研究代表者

大愛 崇晴(Oai, Takaharu)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：70587980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀のヴァイオリン奏者・作曲家ジュゼッペ・タルティーニの理論的主著『和声の真の知識に基づく音楽論』(1754)第5章を分析した。彼は古代ギリシア音楽と同種の諸性質を当代の民謡に見出し、それらを「自然」という普遍的な観念に根拠づけている。ヴェネツィアのゴンドラ漕ぎの歌に着想を得たタッソのアリアは、タルティーニが古代音楽に見出す「自然」の原理を作曲実践において反映させたものと考えられる。また、タルティーニと交友関係にあった貴族ジャンリナルド・カルリの古代音楽観についても検討し、両者において古代音楽は純粋な理想であり、同時代の創作や評価の基準として機能していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内ではこれまでほとんど研究対象とされてこなかったタルティーニの理論的著作を精査すること自体が芸術学分野で大きな学術的意義を有することは明らかである。また、本研究の成果により18世紀における古代音楽に関する理解や表象の一端が明らかになったという点で、西洋音楽史のみならずヨーロッパ文化史全体の知見の向上に一定の寄与ができたと考えられる。さらに、過去の歴史観を実証的な方法によりメタ的な視点で捉えることは、現代の私たち自身の歴史観を振り返る契機にもなりうるという点で、社会的意義も小さくない。

研究成果の概要(英文)：I analyzed the fifth chapter of Giuseppe Tartini's *Trattato di musica secondo la vera scienza dell'armonia* (1754), his theoretical chief work. Tartini found a commonality between the features of ancient Greek music and those of folk songs of his time in that both of these musics were based on the universal idea of "nature." His small works titled *Aria del Tasso*, composed on the basis of songs by gondolieri in Venice, could reflect the principles of "nature" that he recognized in ancient music. I also examined opinions about ancient Greek music of Gianrinaldo Carli, a Tartini's noble friend, and it turned out that both of them regarded it as a pure ideal and as the touchstone of creation or evaluation of music of their time.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽理論 タルティーニ

1. 研究開始当初の背景

古代ギリシア以来、西洋の音楽理論は数学的思考と不可分の関係にあったことはよく知られている。その中核を担っていたのは協和音の原理を単純な整数比に還元するピュタゴラス派の考え方である。それは17世紀に至るまで、神秘主義的あるいは宇宙論的な性格を帯びつつ、音楽の合理性(数による説明可能性)と、他の芸術諸ジャンルに対する音楽の存在論的優位性を担保してきた。18世紀啓蒙主義の時代に入ると、音楽理論の数学的側面は、より実際の現象に即した物理学の一分野である音響学として発展を遂げたが、音響体としての弦の分割に基づいて、数比と音程の関係を考究するピュタゴラス派以来の学問的伝統は維持され続け、それは18世紀フランスを代表する作曲家・理論家であるジャン＝フィリップ・ラモー(1683-1764)の理論的著作においても明確に認めることができる。しかし、国内における西洋音楽理論史研究の現状は、主として実践的な作曲理論に焦点が当てられ、18世紀以前の音楽理論における数学的側面に関しては等閑視されてきたと言わざるを得ない。いかなる芸術であっても、その時代に支配的であった自然観・世界観のなかで生み出されるものであるため、一見音楽とは直接の関係がないように見える同時代の学問の全体的状況や科学的知見を糸口として、その時代の音楽観の新たな側面を提示することができるのではないか。本研究開始当初の背景には、このような問題意識を根底に持ちつつ、目下のところ、特殊音楽的な視点を超えて、広く文化史・精神史のなかに音楽を位置づけるための実証的な研究がまだまだ不十分であるという現状認識があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、18世紀イタリアのヴァイオリン奏者・作曲家ジュゼッペ・タルティーニ(1692-1770)の理論的著作の検討を通じて、そこに上記のピュタゴラス派以来の音楽理論の数学的伝統がどのように継承されているかを検証することにある。とりわけ、先行研究が指摘しているとおり、タルティーニの音楽理論書の内容が、ルネサンス人文主義における諸思想と多くの共通点を有し、啓蒙主義の時代にはそぐわない旧態依然とした傾向を強く示しているとするならば、彼のそうした思想的傾向性はどこに由来するのか、また啓蒙主義の時代になぜあえて時代に逆行するような思想的スタンスを取ったのかについて、文献学的に明らかにすることが、本研究の主たる目的であった。

3. 研究の方法

タルティーニの理論的主著『和声の真の知識に基づく音楽論 *Trattato di musica secondo la vera scienza dell'armonia*』(1754、以下『音楽論』と略記)を中心としたタルティーニの理論的著作、およびそれに関連する一次・二次資料の調査・収集を行い、それらを精読する。

4. 研究成果

(1) 『音楽論』第五章におけるタルティーニの古代音楽観と彼の作曲実践との関連

タルティーニの主たる活動の場であったパドヴァの聖アントニウス聖堂の資料館に手稿譜(*I-Pca*, Ms.1888)で所蔵されている、通奏低音付き、あるいは無伴奏の独奏ヴァイオリンのための26のソナタ集(1745~50頃成立)のなかには、タッソのアリアと題されたきわめて短く簡素な楽章が複数存在している。そこには、16世紀イタリアの詩人トルクヴァート・タッソ(1544-1595)の代表作『イェルサレム解放』の一節が歌詞のように書き込まれており、ソナタという純粹器楽による本曲集のなかでとりわけ目を引く。ゲーテの『イタリア紀行』(1816)などを参照すると、これらの曲は、ヴェネツィアの Gondola 漕ぎによるタッソの詩の朗誦をモデルにしていると推測できる。他方、『音楽論』の第5章は、古代と当代の音楽の比較という、ルネサンス以来の音楽書の伝統的なトパスに基づいた記述がなされている。そこでとりわけ主題的に論じられているのは、古代ギリシア人が実践していた音楽による、情動の問題である。タルティーニによれば、古代ギリシアでは、ある特定の感情を聴き手に喚起するために、詞と密接に結びついた、和声を伴わない単旋律の歌が歌われていた。こうした見解自体はルネサンス人文主義者たちによる古代音楽観を継承したものだ、彼の主眼は、そうした音楽実践のあり方を「自然」とみなす一方で、巧みな和声や転調を駆使する当代の音楽は「自然」に反する人為的な技術によるものであり、「自然」は人為(技術)よりも強力だと主張することにある。注目に値するのは、タルティーニがその例証として、同時代の民衆による単純な音楽への好みを挙げている点である。彼が『音楽論』第5章で掲げる「自然」とは、時代をこえて人間に内在する情動の原理と解釈することができるが、上述のソナタ集におけるタッソのアリアでなされた民謡の採用は、古代ギリシア音楽を規定する原理である「自然」を、タルティーニが同時代の民謡の単純な性格に見出

し、そこに新たな器楽表現の可能性を求めた結果ではないかと考えられる。

以上の研究成果は、美学芸術学会 2020 年度大会（2020 年 10 月 24 日 zoom 開催）において口頭発表し、それをもとに単著論文「ジュゼッペ・タルティーニ タツソのアリア の創作理念 - 『音楽論』第五章における「自然」概念を手がかりに」(『美学芸術学』第 36 号, 2021 年 3 月) を発表した。

(2) カルリの古代音楽観

パドヴァにおいてタルティーニと交流があったと考えられる貴族で経済学者ジャンリナルド・カルリ(1720-1795)が著した『古代と当代の音楽についての考察 *Osservazioni sulla musica antica e moderna*』(1743 執筆, 1786 公刊)の読解と分析を通じて、彼の古代音楽観を分析した。その結果、カルリにとって古代ギリシア・ローマの音楽は、この上ない情動効果を持つものとして理解されている一方で、カルリ自身はその実態が不明であることに自覚的であり、古代音楽をあくまで観念上の理想型として捉えていることが明らかとなった。カルリがタルティーニの音楽のすぐれた情動効果を評価する際に基準とするのも古代ギリシア音楽である。(1)で明らかにしたタルティーニの古代音楽観とカルリのそれを、16 世紀末のフィレンツェにおいて、オペラという新ジャンルの創出に貢献したヤコポ・ペーリ(1561-1633)の古代音楽観とともに比較考察し、その成果は、単著論文「理想としての古代ギリシア・ローマの音楽 - ペーリ、タルティーニ、カルリの古代音楽観」(『日本チェンバロ協会年報』第 5 号, 2021 年 5 月)において公表した。

(3) 今後の課題

本研究においては、上記(1)(2)のような一定の成果を生むことができた一方で、タルティーニの音楽理論と、ピュタゴラス派以来の数学的な思考様式との関連性については、継続して研究が必要な状況である。その要因として、タルティーニの文章(用語法・構文等を含む)がきわめて不明瞭であること、タルティーニによる音楽理論上の主張を理解するためには、彼の著作だけではなく、同時代のフランスの音楽理論家たちの議論についても幅広く調査・分析する必要があると考えられること、の 2 点が挙げられる。については、すでにタルティーニの同時代人からも、彼の著作の不明瞭さ、晦渋さが指摘されていたが、実際その読解には多大な困難が伴い、想定以上の労力と時間を要することになった。また、主著である『音楽論』には英語・ドイツ語による現代語訳が一つずつ存在し、それらを活用することができたが、その他の著作については、現代語による翻訳等は存在しない。は、『音楽論』以外のタルティーニの著作を読解するなかで新たに生じてきた課題である。彼の処女作であり主著である『音楽論』の議論の妥当性については、おもにフランスの音楽理論家たちから、肯定的・否定的双方の立場からの反応があった。『音楽論』以外のタルティーニによる刊行物は、基本的にそれらの反応への著者からの応答という側面を持ち、記述の内容・文体ともに論争的である。したがって、同時代のフランスの音楽理論についての知識を十分に得たうえでないと、タルティーニの音楽理論上の主張を真の意味で理解するのは難しい。

以上のような課題の解決を視野に入れながら、研究期間中に物品費で購入した史資料を最大限に活用しつつ、タルティーニの理論を中心に据えた 18 世紀の西洋音楽理論に関する包括的な研究に、今後も継続して取り組んでいく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大愛崇晴	4. 巻 第36号
2. 論文標題 ジュゼッペ・タルティーニ タツソのアリア の創作理念 『音楽論』第五章における「自然」概念を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『美学芸術学』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大愛崇晴	4. 巻 第5号
2. 論文標題 理想としての古代ギリシャ・ローマの音楽 ペーリ、タルティーニ、カルリの古代音楽観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本チェンバロ協会年報』	6. 最初と最後の頁 26-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大愛崇晴
2. 発表標題 ジュゼッペ・タルティーニ タツソのアリア の創作理念 『音楽論』第五章における「自然」概念を手がかりに
3. 学会等名 美学芸術学会第23回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------